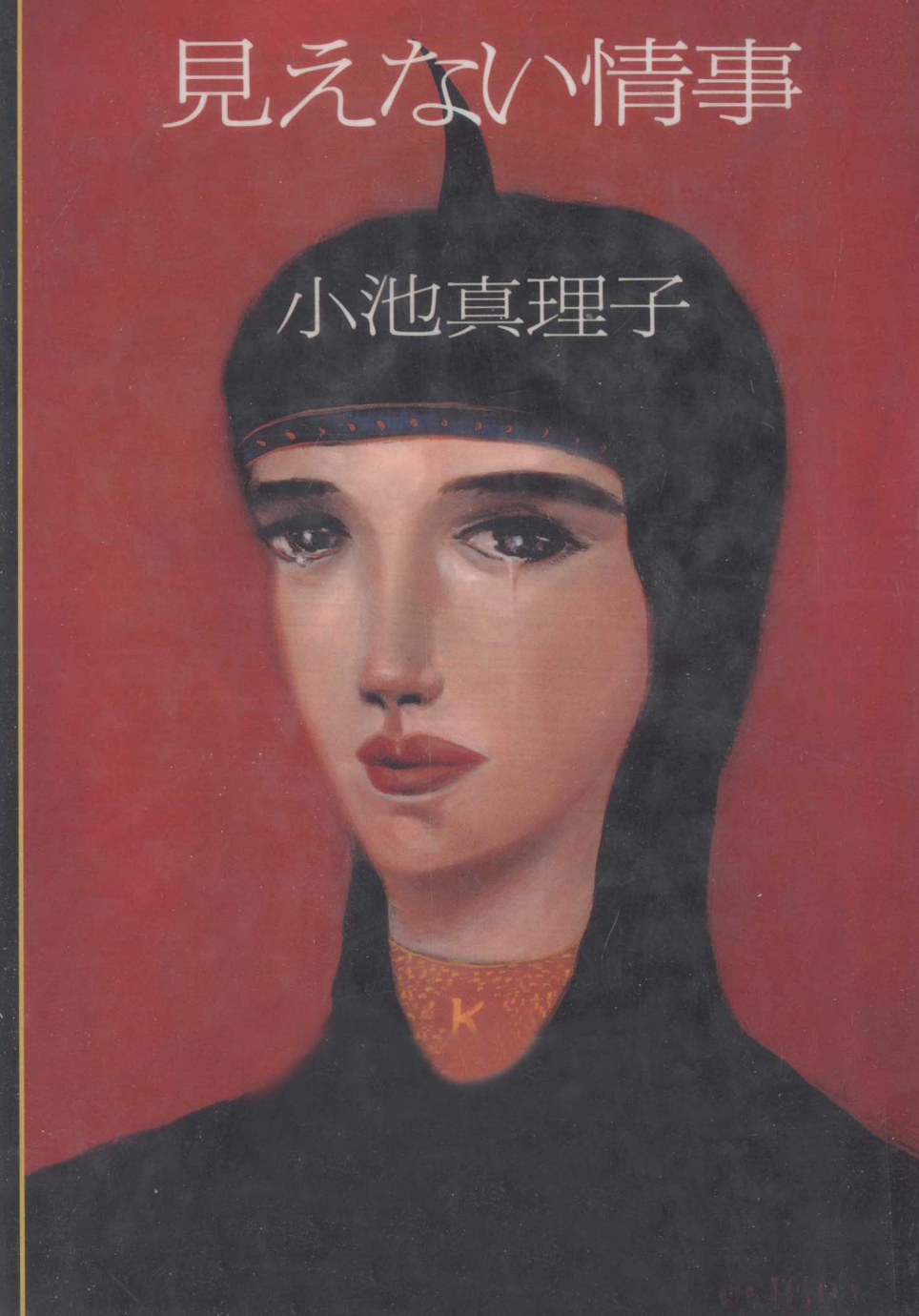
見えない情事

小池真理子



見えない情事

小池真理子

中央公論社

見えない情事　定価一一〇〇円

昭和六十三年四月十五日初版印刷
昭和六十三年四月二十五日初版発行
著　者　小池真理子
発行者　嶋中鵬二
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-八-七
振替 東京二-三四
印刷所　図書印刷
製本所　大口製本

Published in Japan ©1988 CHUOKORON-SHA, INC.
Mariko KOIKE
ISBN4-12-001667-6
日本音楽著作権協会（出）許諾
第八七五三一二〇-七〇一号

目　次

ディオリッシモ　5
春日狂乱　27
寂しがる男　49
黒の天使　73
車　影　107
真夏の夜の夢つむぎ　133
見えない情事　165

装画　落田洋子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

見えない情事

ディオリッシモ

咲田悠子が目を覚ました時、医務室の保健婦は白衣を脱いで、ロッカーから青いサマージャケットを取り出しているところだった。
「あの……」悠子が身体を動かすと、保健婦は振り返ってほっとしたように微笑した。
「お目覚め？」
「どうしちゃったのかしら、私」
「軽い貧血。夏の疲れね」
「貧血？」
「そう。貧血。でも、大騒ぎでしたよ。いきなり、社員食堂で倒れたんだから」
「変ね。覚えてないわ……」悠子はベッドの上に上半身を起こし、乱れた髪の毛を片手で直した。
「頭がどうかしたのかしら。いま、何時ですか」
「六時三十五分」と、保健婦は悠子のハイヒールをベッドの下に揃え、さっさと白い夏掛けの蒲団をたたみ始めた。
「きっかり六時間眠ったから、もう大丈夫」

「ごめんなさい。先生も、もうお帰りの時間だったんですね。起こしてくだされば よかったのに」

「いいんですよ」と保健婦は、ちっともよくないような口振りで言った。「貧血の時は途中で起こさないほうがいいんだから」

「ほんとうにごめんなさい。じゃ、私、これで……」

「また、具合が悪くなったらいつでもいらっしゃい」

悠子は礼を言って医務室を出た。まだ少し、頭がくらくらした。寝ていた時、よほど汗をかいたのか、全身がべとべとしている。

ロッカーから麻のジャケットを取り出し、ショルダーバッグを持って従業員専用の化粧室へ行った。三人の女子社員が一斉に悠子を振り返った。

「チーフ。大丈夫ですかあ」

彼女たちがつける香水と白粉の匂いが鼻について、胸がむかむかしたが、悠子は微笑を返した。

「大丈夫よ」

「びっくりしちゃった。棒のようになって倒れるんですもの」

棒のように？　悠子はいやな気持ちになった。何故、覚えていないのだろう。

「突然なんですよ。食堂のトレイを持ったとたん、バターンって。大騒ぎしたんですから」

悠子は力なく笑って水道の蛇口をひねった。女の子たちは化粧の手を休めて、じっと悠子を見ていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「なんだか、身体中、汗でべとべと。これから渋谷で夕食会なの。臭いって思われるわね」
「大変ですね、忙しくて。あ、これ、今、私たちがつけたとこなんだけど、ディオリッシモをつけませんか。軽い匂いでいいですよ」
ひとりが、悠子の答えも聞かず、小さな香水瓶から二滴ほど香水を指に取った。
「兄夫婦がパリに行った時のおみやげなんです。こっちでは高くてなかなか買う気になりませんよね。耳の下に塗りましょうか」
よく手入れされた柔らかな指が悠子の両耳の下を撫でた。きつい匂いが鼻腔を通り、胸のどこかを刺激しながら通り過ぎた。悠子は「ありがとう」と言った。
勢いよく出した水で手を洗い、夏用のコンパクトファンデーションを取り出して顔をのぞいた。
三十七歳。大手百貨店が私鉄沿線の高級住宅地に進出して、専門店ばかりを集めた新しい形のショッピングセンターを開業した折り、本店から統括マネージャーとして抜擢された。給料は驚くほどいい。学生時代に知り合った今の夫と成城の三ＬＤＫのマンションに住み、最近、伊豆に小さいながらも温泉付きの別荘を買った。
それにしては、コンパクトの中の鏡に映る自分の顔は、疲れた老女のようだ、と彼女は思った。
目の下にいくつかしみがある。何度かスポンジを使ってファンデーションを重ね塗りしてみた。が、しみは隠れるどころか、ひび割れのようになって浮き上がってきた。彼女は軽く舌打ちして、コンパクトを閉じた。
化粧室を出る時、女の子たちに「じゃあ」と声をかけた。彼女たちは口々に「お疲れ様」と答

えた。お疲れ様。本当にその通りだった。働き過ぎて、自分の記憶にないところで突然、貧血を起こした女。まったくお疲れ様、だ。

彼女は通用口に向かって歩きながら、頭を振った。まだ三十七歳。男の同僚も羨む出世を果たすこともできた。子供がいないせいか、夫との仲も安定している。それなのに、最近、時々ひどく陰鬱な気分に陥ることがある。今朝もそうだった。ずっとその気分から逃れられなかった。そのあげくに倒れたのだ。

仕事で格別にいやなことはない。部下に自分より年上の男たちもいるが、彼等ともおおむねうまくいっている。尊敬されてはいないが、少なくとも煙たがられることはないし、自分の悪口が耳に入ってくることもなかった。

なのに、どうして。何が不満だというのだろう……と悠子はまだ暮れきらない真夏の薄墨色の街を歩きながら思った。休日の夜、風呂あがりにビールを飲みながら夫に相談してみたこともある。が、一笑に付されてしまった。

「君が恵まれすぎてるからだよ。ぜいたくな悩みだ」

夫でなくても同じことを言っただろう。ぜいたくな悩み、幸せな悩み……であると。

私鉄の駅が見えた。ここから冷房のきいていない蒸し暑い電車に乗って三十分。本店の役員たちが自分を待っている渋谷のレストランに出かけると思うとうんざりした。ことさら仕事の話があるわけではない。月に一度、馬鹿げたほど格式ばったフランス料理店で、役員諸氏と懇談するだけ。これまで女っ気がなかったので、悠子は必ず招かれた。ていのいいホステス役なのである。

行きたくない、と彼女は思った。行ったらまた、棒のようになって倒れてしまうような気がした。風が吹いてきて、髪の毛が揺れた。ディオリッシモの香りがボブカットにしたさらさらの髪の束とともに、鼻先をくすぐった。

全身が熱っぽかった。なのに手の平だけが冷え冷えとしている。彼女は冷たい手を額に押し当てた。

子供のころはよく熱を出した。今から思うとあまり身体が強くなかったらしい。学校も月に二度は必ず休んだ。

父が勤めに出かけ、弟も学校に行ってしまうと、家の中で母とふたりきりになる。母はよく働いた。朝食の食器を洗うと、次に風呂場に行って洗濯を始める。狭い小さな家だったので、洗濯石鹸の匂いが悠子の寝ている部屋にまで漂ってきたものだ。熱でむかむかする胸が、石鹸の淡い香りを嗅ぐとすーっとした。

洗いあがった洗濯ものを抱えて、母は縁側から庭に降りる。悠子は蒲団の中からそれを眺める。庭の土の匂いが入ってくる。蠅がかすかな唸り声を上げて飛び交う。飼い犬の雑種のデコが、いったいどうしたの？　とでも言いたげな表情で縁先に丸い手を置き、悠子に向かって尾を振る。

「デコ」と悠子は呼んでやる。「悠子、また熱出しちゃった」

デコはいっそう強く尾を振り、きれいなピンク色の舌を出す。

「デコはいいねえ」と母が洗いあげた弟のパンツを片手に歌うように言う。「元気だね、デコは。病気ひとつしたことがない」

自分の名を呼ばれたデコは、今度は母にまとわりつく。サルビアの花のまわりを飛んでいた蜜蜂が、犬の動きに驚いて飛び去る。

隣の家の庭から、さっちゃんのお母さんが顔を出す。さっちゃんは悠子のひとつ下の女の子。よくふたりでカタツムリやタニシを採りに野山を駆け回ったものだ。

「あらあら、悠子ちゃんはお休みなの？」

とおばさんが部屋をのぞきこみながら言うと、母は苦笑する。

「そうなのよ。また熱を出したの」

「夏の風邪は長いからねえ。気をつけないと。そうだ、悠子ちゃん。おばさんがとっておきのシロップを作ってあげようか」

三十分もしないうちに、水飴に大根おろしをまぜたシロップを持って、おばさんはやって来る。「お大事にね、悠子ちゃん」と、玄関先で声がする。デコが吠える。母がデコを叱りつけながら、シロップと冷やした番茶を持って枕元に坐る。母のエプロンからは、うっすらとネギの匂いがしている。悠子は必要以上に大儀そうに身体を起こし、シロップと番茶を交互に飲む。デコが羨ましそうにそれを見ている。

あんまりシロップがまずいので、「ねえ、デコにあげようか」と言うと、母は苦笑し、彼女の残したシロップをひと飲みに飲み干してしまう……。

……気がつくと、悠子は電車の中にいた。昔のことを思い出しているうちに、いつのまにか電車に乗ってしまったらしい。少し汗をかいている。彼女は額に浮かんだ汗を指で拭った。

子供のころは幸せだった。誰でもがそうなのだろうか。いや、違う。不幸な幼年時代を過ごした人は大勢知っている。自分がたまたま、幸せだったに過ぎない。

あの郊外の小さな街。まだ田んぼがあり、近くを流れる小川ではタニシが採れた時代。氏神様を祀る神社で、夏には決まって祭りが行われた。勤めから帰った父にねだって、よく連れて行ってもらったものだ。煙草の形をした薄荷(はっか)パイプを音をたてて吸いながら、弟と金魚すくいをする。弟も悠子も不器用で、いつも二匹くらいしかすくえなかった。露店のおじさんが気の毒そうな顔をし、一匹おまけしてくれたりした。

ある夏、驚くほどたくさんの金魚がとれたことがあった。弟が欲しがっていたデメキンも三匹混じっていた。神社からの帰り道、父は金物屋で立派な金魚鉢を買ってくれた。

だが、その翌日、金魚は一匹残らず白い腹を見せて死んでいた。弟は泣き、学校に行きたくない、とだだをこねて母親を困らせた。その夜、父は帰宅途中、街道で脇見運転のトラックにはねられて死んだ。弟が八歳、悠子が十一歳の夏だった。

弟のユキヒロはどうしているんだろう、と悠子は考えた。十八歳の時、母親とけんかしてぷいと家を出てから一度も帰ってきたことがない。元気に暮らしていることはたまにくる葉書でわかっていたが、何をしているのか、誰と一緒にいるのか、まるで見当がつかなかった。母は弟のことを心配しながら、八年前、心臓を悪くして死んだ。葬式に顔を見せた弟の傍らには、栗色の髪をした三歳くらいの女の子と見事な金髪の若い女性が寄り添っていた。弟は母の納骨を済ませると、家族でアメリカに渡った。以後、音信はない。

電車の窓の外は暗くなっていた。夜風がひんやりして心地よい。悠子は深呼吸をし、我にかえった。馬鹿ね、あたしったら、と彼女は思った。どうして今ごろになって、昔のことばかり思い出すんだろう。本当に疲れているのかもしれない。少し、休暇でもとってのんびりしなくては。

ふっと自嘲気味に笑い、前髪をかき上げて周囲を見たその時。悠子は説明しがたい違和感を覚えて髪に当てた手の動きを止めた。

何かがおかしかった。電車はいつもの通り、規則正しい音を響かせながら走っている。乗客もいつも通り、おとなしく座席につき、雑誌を読んだり、居眠りをしたりしている。どこといって変わったところはない。

なのに何かがおかしかった。悠子は窓の外を見た。町の明かりが夜のとばりの中にぼうっとかすんで見えた。その風景が渋谷に向かう電車の車窓とは違うことに気づくまで、長くはかからなかった。

彼女は反射的に「いけない！」と声をあげた。隣に坐っていた制服姿の女子中学生の目と悠子の目が合った。彼女は照れ笑いをし、「この電車、渋谷行きじゃないんでしょう？」と少女に聞いた。古めかしいセーラー服をきちんと着込んだ少女は、一瞬、怪訝（けげん）な顔をした。

「シブヤ？」

「ええ。渋谷に行くはずだったのに、間違って逆方向の電車に乗ってしまったみたい」

悠子は笑った。もしかするとこれを理由にして、夕食会を断れるかもしれない。

「次の駅はどこかしら」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com